新学習指導要領を見据えた高校英語教育の展望
～ AI 時代における言語活動の充実を通して～

富髙　雅代

１．はじめに

今，学校現場はかつてないほど大きな変化の波の中にある．GIGA スクール構想によって生徒一人一人が端末を使い，さらに生成 AI をはじめとするデジタルテクノロジーがあっという間に私たちの日常に入り込んできた．昨日まで当たり前だった教え方や学び方が，明日にはもう古くなっているかもしれない．そんな目まぐるしい日々の中で，次期学習指導要領の改訂に向けた議論も進んでおり，これからの時代を生きる生徒たちに「どのような力を育んでいくべきか」，私たち教師は改めて根本から向き合う時期にきている．

私は，文部科学省の教科調査官として全国の英語教育の動きを広く見る機会に恵まれた．そして現在は，宮崎県の高校で教頭として，毎日生徒たちの笑顔や悩む姿，そして先生方の奮闘を間近で見ている．この国全体の大きな動きと目の前の学校現場という２つの視点を行き来する中で強く感じるのは，社会がどれだけデジタル化しても，AI がどれほど瞬時に見事な英文を作ってくれるようになっても，人と人とが外国語を通じて心を通わせるコミュニケーションの喜びや本質は変わらないということである．

本稿では，次期学習指導要領改訂の方向性を見据えながら，AI 時代において求められる英語教育とは何かについて考えてみたい．また，数研出版の教科書 *COMET English Communication* を使っていた頃の実感や，探究的な学びへの広がり，そして AI リテラシーの育成といった話題も交えながら，これからの私たち教師に求められる役割について考えたい．

２．これからの英語教育で求められる力とは

現行の学習指導要領では，英語教育を通して実際にコミュニケーションで使える基礎的な技能を育てることに加えて，正解のない未知の状況でも，自分で考え，判断し，表現する力を育てることがより一層求められている．次の改訂では，おそらくこの流れがさらに進み，ただ英語のルールを覚え，英文を理解するという段階から，英語を使って，自分が何を考え，周りの人や社会とどう関わっていくかという，より深い人間的なつながりが求められるようになるだろう．

また，生成 AI の登場は，正しい英文を作るというハードルを劇的に下げた．生徒たちは今や，スマートフォンやタブレットを開き，日本語で指示を出せば，あっという間にネイティブスピーカーが書いたような自然な英語表現を手に入れることができる．このような便利な時代において，私たちが育てるべきなのは，AI が代わりにやってくれるような，ただ決まった英文を機械的に処理する力ではないはずだ．同時に，AI が提示した整った英文が，本当に自分の伝えたい微妙なニュアンスや意図を正確に表しているかを見極め，自らの責任で取捨選択する判断力も不可欠となる．

今，生徒たちに必要なのは，自分自身の気持ちや考え，価値観を出発点にして，相手の立場やその場の状況を想像しながら，コミュニケーションの目的を明確にし，自分の言葉でメッセージを紡ぎ出す力である．情報を受け身で聞いたり読んだりするだけでなく，それが本当かどうかを疑ってみたり，自分なりの意見を持ったりして，他の人と協力しながら問題を解決していく力と言ってもよいだろう．これからの英語の授業は，単に文法的に正しい英語を話したり書いたりする練習から抜け出し，自分の内面にある伝えたい思いや考えを言葉にして，相手とわかり合おうとする言語活動へとステップアップしていく必要がある．

３．自分事としての深い学びと教師の負担軽減

自分で考え，表現する力を育て，コミュニケーション能力を身につけさせるために，毎日の授業で使う教科書はとても大切な相棒である．私が以前，*COMET* を使っていたとき，この教科書は生徒が「英語で話してみたい」「書いてみたい」と思えるような工夫が随所にあると感じていた．本文を読んだり聞いたりしたあとに，必ずその話題を自分事として捉えるためのステップが用意されていた．例えば，環境問題などの社会的な課題に関する英文を読んだとき，英文の内容理解で終わるのではなく，「あなたならどう思う？」「あなたの住んでいる地域では似たような問題はないかな？」といった問いかけが設定されている．

生徒はここで，教科書の中の世界だった内容を，自分自身の生活や経験に引き寄せて考え始める．そして，自分なりの意見や感情が湧いてきたところで，それをペアの相手に話したり，文章に書いたりするアウトプットへと自然に進んでいくことができる．インプットから深い思考を経て，自分の思いを表現するという流れが自然に作られているため，私たち教師も無理なく，生徒が主役になる言語活動を組み立てることができた．

今なら，教科書の良質な本文やテーマをベースにして，AI をうまく組み合わせることで，教師の教材研究の幅を劇的に広げることができる．「この話題で，もう少し易しい語彙を使った派生問題を作って」「概要を問う選択問題を作成して」と頼めば，質の高いオリジナル教材やテスト問題が容易に出来上がる．これまで教師が膨大な時間を割いていた英文作成や問題作成の大部分を AI が効率的にサポートしてくれるのだ．AI を安全かつ効果的に活用することで，教師の負担を減らしながらバリエーション豊かな教材展開を行うことが可能になるのである．

４．AI 時代の探究学習と教科横断的な視点

次期学習指導要領の議論において，現行の成果を土台としつつ，それを更に高度化させていくのが，探究的な学びと，教科の枠を越えた教科横断的な視点である．英語の時間だけで完結するのではなく，他の教科で学んだことや，生徒自身が見つけた探究課題を，英語を使ってさらに深めていく学びが，これからますます重要になってくる．

ここでも AI は，とても頼りになるツールとなる．例えば，理科の授業で学んだ気候変動の最新データや，公共の授業で知った世界のニュースについて，生徒が英語の元の記事を読んでみたいと思ったとする．これまでは難しすぎる英語に挫折してしまっていたかもしれないが，AI に「高校生にもわかるレベルの英語に要約して」と依頼すれば，生の海外の情報や多様な価値観に，高校生でも簡単に触れることができるようになる．言語の壁が低くなることで，生徒の知的好奇心はどんどん外の世界へと広がっていく．

また，「総合的な探究の時間」などでまとめた自分たちのグループ研究の成果を英語で世界に発信するという場面でも，AI は良き相談相手になってくれる．自分の考えを英語にする過程で，「こういうニュアンスを伝えたいときは，どんな英単語を使うといいかな？」と AI に相談することは，英語をただの学習の対象ではなく，自分の世界を広げる便利な道具として使う経験となる．

自分事として考え，発信する力は，こうした探究学習の場面でこそ，生き生きと発揮されるはずだ．単に英語の正確さを競うのではなく，AI を強力なツールとして活用しながら，母語と同じように英語を通じて深く思考し，他者と協働する経験を積むこと．これこそが，これからの探究的な学びに求められる本質的な言語能力の育成と言えるだろう．

５．外国語科の授業で育む AI リテラシーと情報モラル

一方で，こうした便利な AI を授業で活用していくためには，どうしても気をつけなければならないことがある．それは，AI に思考そのものを委ねてしまわないということである．

AI が瞬時に見事な答えや英文を出してくれる時代だからこそ，逆に，生徒自身が英語を通してどれだけ深く考え，悩み，自分なりの答えを導き出すかというプロセスの価値が重要となる．効率や正解だけを求めて AI に思考を丸投げしてしまえば，生徒が自ら考え，成長する貴重な機会が失われてしまう．考えることを手放してしまえば，それはもはや本来の意味での教育とは呼べなくなってしまうのではないだろうか．

だからこそ，AI リテラシーや情報モラルの育成

が重要になる．「それは情報の先生が教えることでは？」と思うかもしれないが，私は外国語科の教師も，日々の授業の中で基礎的なことをしっかり伝えていく必要があると考えている．

例えば，AI が生成した見事な英文をそのまま自分の意見として発表してしまっては，本当の学びにはならない．「AI はとても便利だけれど，時々もっともらしい嘘（ハルシネーション）を表示することもあるから，最後は自分でしっかり確認しよう」とか，「自分の個人情報や，友達のプライバシーに関わることは絶対に AI に入力してはいけない」といった基本的なルールは，AI を使うその瞬間に教えるのが最も効果的である．

また，海外の文化や考え方を学ぶ外国語科だからこそ，「AI が作った文章には，国や地域の偏見（バイアス）が含まれているかもしれない」という批判的なことを意識させることも大切だ．AI をすぐに信じるのではなく，「本当にそうだろうか」と立ち止まって考える力をつけることは，多様な価値観を理解する機会の多い外国語の学習とも深く結びついている．便利な道具に振り回されるのではなく，賢く安全に使いこなす技能を育てることも，これからの英語教師の大切な役割の 1 つと言えるだろう．

６．教師にしかできない見取りと伴走

このように，テクノロジーが進化し，AI がいろいろなことを手伝ってくれる時代において，私たち教師の役割はどう変わっていくのだろうか．私は，AI が教材作成などを手伝ってくれることで生まれた時間のゆとりを，人間にしかできない教育の専門性に注ぐべきだと思っている．それこそが，生徒の学びの様子をしっかりと見取り，やる気を引き出し，伴走していくことである．

言語活動や探究学習の中で，生徒が自分の言葉で誰かに何かを伝えようとするとき，そこには必ず迷いや葛藤がある．「こんなこと言って伝わるかな」「どう表現すればいいんだろう」と悩みながらも一生懸命に言葉を探す姿や，相手に自分の思いが伝わってパッと表情が明るくなる瞬間．そうした教室の中で起きる小さな変化を見逃さず，「いい言葉選びで伝えられたね」「前回学んだ表現をここで使えて素晴らしいね」と声をかけることは，AI にはできない，教師ならではの温かい専門性である．

生徒が複雑な思いや考えを英語にできずに立ち止まっているときは，「あなたが一番言いたいことは，どういうこと？」と一緒に考え，寄り添うことができる．また，出来上がった英文の正確さだけを点数にするのではなく，その生徒がどれだけ悩み，工夫し，伝えようと努力したかという過程を形成的に評価することも，私たち教師にしかできない大切な仕事だ．生徒の心に火をつけ，失敗を恐れずに外国語でコミュニケーションに向かう勇気を育てるファシリテーターとしての役割が，これからますます重要になっていくのである．

７．おわりに

次期学習指導要領の改訂や，あっという間に進んでいくテクノロジーの変化を前にすると，私たち教師もこれからどうなるのだろうかと少し不安に思うことがあるかもしれない．しかし，この変化の波を怖がるのではなく，生徒たちの学びをもっとワクワクするものにしてくれる強い味方として，教育を深化させる好機と捉えたい．

生徒は授業の中で，教科書の英文を聞いたり読んだりし，その話題を自分事として考える．そして，他の人とその考えを共有して違う意見に耳を傾けたり，他の教科での学びとも繋げたりしながら，自らの考えを再構築していく．さらに AI も活用しながら，自分の思いを英語で伝え，伝え合おうとする．教師は，その過程で起こる生徒の成長を確実に見届け，さらなる成長へとつなげる仕掛けを作っていく．

AI と共存し，AI ができることは AI に任せることで，私たちは，人と人との心の触れ合いという，教育の一番温かくて本質的な部分に時間をかけられるようになる．AI が瞬時に答えを出せる時代だからこそ，自分で深く考えた言葉こそが意味を持ち，相手や状況を配慮したコミュニケーションがより一層大事になる．そのような言語教育を，これからも英語という教科を通して担っていきたい．

（宮崎県立妻高等学校 教頭・
前文部科学省初等中等教育局 教科調査官）